

音楽の友

1996年7月号

●倉敷管弦楽団

昭和49年に設立され、数多くの著名な指揮者、ソリストと共演してきた倉敷管弦楽団の第39回定期演奏会を聴いた。プログラムはハーバーの「弦楽のためのアタージュ」、呂相弦、王燕樵、劉徳海の琵琶協奏曲「草原小兄妹」、それにベルリオーズの「幻想交響曲」の3曲。指揮金洪才、琵琶・陶敏頼。

1曲目は、よく訓練されたピッチの合わせやインサンツツの揃いが正確で聴いていて気持ちがいい。しっかりとした厚い響きの推進力や内面的に大変深い弦の表情は素晴らしい。

2曲目の陶敏頼は、テクニックも音楽も申し分なく、リズムカルで細かいパッセージも一音一音がはっきりして

おり、多岐に亘る表現力や表情の変化は相当なもの。たまたまう少し音楽の流れに変化のある抒情性や歌心、それに自由なテンポの揺れのある遊びも欲しかった。

終曲の「幻想交響曲」は、指揮者の意図がはっきりと反映された演奏で全5楽章が無理なく統一され、曲の捉え方もよくメリハリがあり美に表情豊か。第3楽章をゴッルアングレやウァイオリンのユニゾンが美しく、各声部の動きがよくわかる。第4、5楽章はよく鳴ってパワフルだが、繊細でたいへん美しい。色彩が精緻で豊かであり、緊張感が最後まで持続したのがいい。弦も管も高い水準で音楽する喜びや情熱が伝わり、聴く者の心を捉え感動を与えた(5月26日・倉敷市民会館)。

△以上、日比野章彦